

ギターと私(11)ー大切にしている言葉

今回は、約半世紀間ギターを弾いてきた間に会い、私の心を今なお支え続けていてくれる言葉について書きたい。

「本当に心を許した相手に、自分の真実の言葉を語る時、人はむしろ小さな声になるのではないか。」——これは、鈴木大介氏の CD、「あなたと私」のジャケットに新井鷗子氏がお書きになった一節である。「大きな声で何かを訴えるのも強いインパクトを残すが、小さい声ながらも心に深い印象を刻む語り口もある。切々と語りかけるようなギターの音は、聴く者の琴線に触れて、浸々とした情緒を心の底から引き出す。」と始まるこの解説を読んだ時、思わず「なるほど」と呟いた記憶がある。

言うまでもなくギターの音量は小さい。その制限の中で、フルートやヴァイオリンと共演していた私は、それらの他楽器と対等に渡り合うべくバリバリ弾いていた。必然的に音質は荒れ、ミスも多くなった。そんな状況で巡り合った新井氏の言葉は、言わば、ギターに音量という「ないものねだり」をしていた自分の愚かさに気づかせてくれた。

オーケストラが奏でるフォルテッシモは、聴く者の心を震わせる。対して、ギターから紡ぎ出されるピアノッシモは、人の心中にやすやすと入り込み琴線に触れる。もちろん、限られた音量の中でのデュナーミクは考えなければならないが、ギターは、限られた音量を前提にした楽器であることを忘れてはいけないであろう。

次に、故齋藤秀雄氏が生前口ぐせのように仰っていたと読んだことがあるが、「音楽というものは、大人にならなければ分からないものなんだよ」という言葉にも大きく支えられた。ギター音楽に何十年関わってきた現在でも、分からないことは多々存在する。現在でさえそうなのだから、若いころは分からないことばかりだった。そういった中で巡り合った齋藤氏のお言葉は、正にわずかな希望の光だった。性急に結論を求める必要などなく、分からないことはそのまましておけばよいのだ、と素直に納得できた。いつか分かる日がくることを楽しみに、また勉強していけばよいことなのであろう。ところで、大人とは、いったい何歳以上のことを指すであろう？それはおそらく具体的な年齢を指すのではなく、喜怒哀楽に代表される人間の「生きる悲しみ」のようなことを実感した年齢なのではないだろうか？ そうであるならば、人間はだれしも、生きている限り「大人」に向かって経験を積み重ねていくわけであり、より豊かな「大人」を目指して試行錯誤を繰り返していく他はないのであろう。

さて、自分のギター人生を振り返ってみたくて始めた駄文だが、11 回の長きに亘った。一回の文字数が、ざっと四百字詰め原稿用紙に 4 枚の分量だから、合計 40 枚以上書き綴ってきたことになる。これほどの枚数を書くのは、大学の卒業論文以来のことになる。自分としては、歩いてきた道がはっきり認識でき、これからどう生きていくかという方向性も見えた気がしているが、他の方々が読んでもあまり役に立たない代物であったであろう。

一つだけ参考にしていただけたら、小さな努力を重ねていくこと以外に、ギター上達の道はないという、ごくごく平凡な結論だけである。生ある限り練習していこうという決意(どれだけ練習できるか怪しいものだが)を披露して、この長い文章を終えたい。最後まで読んでいただけた方がみえたなら、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。そして、これからもよろしく願います。

(2020.5.10 記)